



特集

未来を支える

# 小児科

武井先生  
退任記念号



—— 武井先生は副院長として院外の仕事も数多くされたと思うのですが、その辺りも少しお話しいただけますか？

**武井** 茅野市に「こども・家庭応援計画（どんぐりプラン）」というのがある。平成9年から関わりました。平成9年から始まったビーンズプランという茅野市保健福祉計画の一環でした。保健と福祉という側面から、妊娠中の胎児から高校を卒業するぐらいまでの子どもたちが少しでも健康に育つようサポートをしていくという事業で



嬉しいですね。

す。ここで、保健所や児童相談所の方、警察、教育関係、助産師会、ボランティアなどさまざまな病院の中とは違う世界の人と接する機会ができました。面白かったですね。そこでいろいろな議論をして実際にかたちにしていきました。わかりやすい例を挙げるとベルビア（駅ビル）にある0123広場ご存じですか？茅野市も力を入れてくれてスタッフを5人常駐させてくれました。運営委員長をさせていただきましたので、ずっとクリスマス会では市長、教育長さん達とサントラの役を続けています。良い思い出です。2階にはCHUKORANDIチノチノもあります。中高生はコンビニエンスストア前でたむろしていた時代があるんですが、それじゃなくて子どもたちがちゃんと居られる、自由に過ごせる場所作りにも関わりました。子どもたちが設計からやって、今も大人が入れないたまり場として続いています。

—— 看護学校の設立にも尽力されたと聞きました。

**武井** きちんと看護のレベルを上げて、この病院としての看護の理

念という統一のものをつくるべきだという話があって、そこから看護学校をつくる話がありました。准看護師を看護師にするための進学コースからスタートして、徐々に今のカタチになりました。どうやって看護学校をやるか方法がわからなかったのですが、鎌田先生が池野栄子先生という看護師さんにお願いをして、その方が中心になってからは軌道に乗りました。池野先生が看護学校の教員も集めてくれてしっかりしたものができたんです。

—— 小児科医だけでなく行政や看護学校の仕事まで幅広いですね！最近10年くらいは武井先生もご存じのように、若い医師を育てることで当院の医療が守られる今のカタチになっています。数十年にわたり当院の医療を支えてきた武井先生から当院に集まる若手たちにメッセージはありますか？

**武井** 小児医療ということに関していうと、若い先生たちには現場を楽しんでもらいたい。子どもたちの可愛さを。子どもって嘘をつかないので重症だったらクツツとするし、遊んでいれば心配ない、

顔をみればだいたいのくらの緊急度か分かります。お友達になるという感覚が大事です。当院の場合、子どもの入院患者は決して多くはないですが、できるだけ病棟で子どもと遊んでみる。正常をいっぱい見たいなと異常がわからないので、たくさん遊んで普段の様子を知るの大切なんです。外來でも同じ。いろんな子どもたちを見て話しかけて欲しい。子どもの発達のこと教科書的な知識だけでなく、遊びの中でしか発達の状態って確かめられない部分がある。聴診器を当てるのもよいけれど、子どものさりげない動作のいろいろな情報が詰まっていることも。遊ぶ中で「教科書に書いてあった発達ってこういうことなんだ」っていうのを学んでいくというようなかたがいがいいんじゃないかなと思います。

—— 最後に地域の方にメッセージをお願いします。

**武井** まだまだ私もこの地域ですと生きていく人間ですので一緒に子どもに関わる仕事をしていきたいなと思います。これからもよろしく願います！

武井 義親 | たけい よしちか

自治医科大学小児科、山梨医科大学(現・山梨大学)小児科にて研修 平成2年より諏訪中央病院。

32年間お疲れさまでした！

退任記念インタビュー



# 子どもを診ること 未来をつくること

副院長 小児科医 武井 義親

—— こちらに来たきっかけを教えてください。

**武井** 出身が辰野町です。栃木県にある自治医科大学の小児科で研修していたのですが、長野県に帰ろうとなりました。いくつかの候補のうちここに見学に来て、鎌田先生につれられて院内を見学しました。すると、ちょうど放射線科や検査科などのスタッフたちが学会発表の準備をしていました。コメディカルの方たちもこんなに熱心に準備をするんだと驚くと同時に、非常に活気があって良い病院だなと思いました。そんなきっかけがありました。

—— 小児科医になった経緯は？

**武井** 小児科は心臓とか消化器とか関係なく全部を診ることができた。そして何よりも、「子どもを診るといことは未来をつくっていく」。子どもは自分たちより長生きしてくれますから。

—— こちらに赴任された頃の当院の小児科診療はどのようでしたか？

**武井** 当時は自分一人しかいない。一人だと相談ができなくて不

安もありました。近くの医師住宅に住んでいて夜の回診というのもしていました。新たな入院患者がいると、夜もう1回ちょっと診に行って帰るといふカタチでやってきた時代でした。そのうち山梨大学からの医師と二人体制になって、相談できるのでとても気が楽になりましたね。山梨大学との関係づくりは大事な点でした。自分はアレルギーや喘息などが得意分野でしたが、神経や内分泌など自分の不得手な部分は専門外来というカタチでも医師を派遣してもらいました。心臓など重症疾患の子どもをどうするかということも課題でした。最初から大学病院で診ていただいたり、県外の病院にお願いしたこともありました。その後、長野県立こども病院ができて、重症疾患の対応はより安心になりました。

—— 約30年勤務してきて小児科冥利に尽きるな、などと思う瞬間はありますか？

**武井** 月並みですが、子ども時代に診療していた方が大人になって、今度はお母さんになられて、そのお子さんを診療できる場面などは

(聞き手 脳神経内科 渡辺慶介)

子どもの未来をつくれる  
お手伝いができると  
いいなと思って毎日  
診療に臨んでいます。

小児科部長  
佐藤 広樹医師に  
インタビュー



—— まず当院の小児科をご紹介しますか。

**佐藤** 当院小児科は、武井、佐藤、金井、渡邊の4人体制で通常の診療を行っています。午前中は一般小児科外来の診療を、午後は予防接種や検診に加え、予約外来診療を行っています。また、非常勤医師として、血液、心臓、内分泌、神経を専門とする医師が主に大病院から派遣されており、高い専門性を要する診療にも対応しています。

入院患者さんは、肺炎や喘息、アレルギーや川崎病など比較的多く見られる小児の病気に対応します。重篤な場合は長野県立こども病院へ搬送されることもあります。

—— 小児のかかりやすい病気は季節によって異なると聞いています。

**佐藤** 新型コロナウイルスが流行する前のこの時期(冬季)は、ウイルス感染で入院される子が多かったです。例えばインフルエンザやRSウイルスなどの肺炎や気管支炎を起こすウイルスや、ノロやロタウイルスなど胃腸炎を起こす

ウイルスの感染などです。しかし、新型コロナウイルスが流行してから、特にインフルエンザの患者さんは全く見なくなりました。また、ロタウイルスに対するワクチンが定期予防接種されるようになってから、ロタウイルスによる胃腸炎も減っています。

—— 新型コロナウイルスに関してはいかがでしょうか。

**佐藤** 最近は新型コロナウイルスの診療が最も大きな比重を占めています。小児の新型コロナウイルスの診断や、新型コロナウイルスに感染してしまったときに入院が必要かどうかを判断する診察を行い、入院した子の診療も行っていきます。新型コロナウイルスが開始した頃は、小児のコミュニティで流行することはほとんどなく、家庭内感染といっても親が家庭内に持ち込んで感染が広がることが多かったのですが、今年になって流行しているオミクロン株の場合、子どもから子どもにうつるため、学校で集団感染が生じ休校になったりすることがあります。感染様式が大きく変わっていることを感じています。

—— 最近の新型コロナウイルスの流行にあたって、ご家庭で気をつけることや生活のアドバイスを教えてください。

**佐藤** 家庭内感染を防ぐことはかなり難しいと思います。もちろん家の中ではマスクをして、食事やお風呂は一人で、できるだけ個室に隔離して別々に寝るといったことができればよいのですが、特に小さいお子さんの場合は非常に困難です。あまりやり過ぎてしまうとお子さんにとって強い負担となります。

ご家庭でできる工夫として、おじいちゃんおばあちゃんと同居されていたり、近くに住んでいて頻繁にお会いしている場合などは、新型コロナウイルスにかかっているあいだはできるだけ居住空間を別にしたリ、面会を控えていただいたりするなど、大人側ができる工夫を可能な限り行うという姿勢が大切だと思います。

現在流行中のオミクロン株は、感染力は強いですが毒性は弱いと言われています。もしお子さんが新型コロナウイルスにかかってしまった場合でも、重症になることはほとんど

ありません。しっかり食べてしっかり寝るといふ当たり前のことをすることが最も大切です。今の子どもたちは私たちが考えている以上に、手洗いとマスクの意識は高いですよ。

—— 小児科診療のよいところを教えてください。

**佐藤** 小児科診療のよいところは、患者さんが確実に自分より若い方たちですから、その人たちが健康に過ごすことができれば、ずっと将来何十年も人生が続いていくという点です。もっと言えば、僕が死んでしまった後にも患者さんが健康で生きていける下地を作れることです。子どもの未来をつくれるお手伝いができるといいなと思つて毎日診療に臨んでいます。

—— 小児科を受診するご両親に對してお伝えしたいことはありますか。

**佐藤** お伝えしたいことは3つあります。まず、お子さんの状況が一番わかるご家族と一緒に受診していただければありがたいです。小児

の場合本人からお話を聞くことが難しいことも多いので、受診の経緯はどうしても一緒にお越しいただいたご家族にお伺いすることになります。受診までの状況がわからない方がお付き添いされた場合、十分にお話が聞えず診察も不十分になりかねません。もしどうしてもお付き添いできないときは、受診するに至った経緯をまとめたメモなどを付けてもらうととても助かります。

次に、お薬手帳や母子手帳も受診の際は忘れずに持ってきていただくと、別の病院でどんな薬が出たか、どのようなワクチン打下了かなどがすぐにわかります。

最後に、お子さんの(生き物としての)「生きのよさ」を大切にしたいと思っています。例えばちょっと熱があつて食欲はないけど、水分は取れていて元気があるという場合、通常緊急の受診は不要なことが多いです。しかし、熱はないけどぐったりしていて、何かおかしい、呼吸が苦しうとか、目がうつろで遊ぼうとしないなど、普段の状況をわかる方がみておかしいなと思つたときは、緊急の受

診を検討してもらつてよいと思います。

ご両親のみでこれらの判断をするのは大変だと思いますので、困りの場合「#8000(子ども医療電話相談事業※1)」に連絡するのが良い方法です。小児科医や看護師が常駐しお子さんの症状に応じた対処の仕方や、受診判断のアドバイスを受けることができます。長野県内は毎日19時〜翌朝8時の間、相談可能ですのでぜひご利用ください。

新型コロナウイルスの流行は子どもたちにも強いストレスを与えています。外出時はマスク、手洗い、三密を避けるなどが求められますが、うちではしっかり親子でコミュニケーションを取っていただき、お子さんの気持ちをしっかりと守つてあげてくださいね。

(聞き手 腫瘍内科 門倉玄武)

佐藤 広樹 | さとう ひろき

山梨医科大学(現・山梨大学)小児科、関連病院にて研修。平成21年より諏訪中央病院。

(※1)ダイヤル回線・IP電話の場合は0263-34-8000へおかけください(長野県の場合)

## 佐藤広樹医師インタビュー

追記:

「新型コロナウイルス感染症に関して小児で重症化が少ないという話をさせていただきましたが、日本全体で考えると重症の方がいないわけではありません。日々新しい情報が追加され、状況が変わっていますが、情報過多に振り回されすぎないように正しい情報を選び生活していただくようお願いいたします。」

諏訪中央病院 小児科医師 佐藤広樹

2022年3月15日時点

# 発熱時の ホームケア

文：小児科  
かない ひろあき  
金井 宏明



「発熱」は子どもが受診するときの症状として多いものの一つです。発熱した際にご家庭でできるケアについてお話しします。

①熱の上がり始めは、手足が冷たくなり寒がることもありま

②水分補給を小まめに行ってください。湯冷まし、麦茶、子ども用イオン飲料などの水分を与えましょう。ゼリー（こんにゃくゼリーは×）、アイスクリーム、シャーベットなどもよいでしょう。母乳やミルクは欲しがれば与えてください。食事は無理に与える必要はありませんが、欲しがれば与えても問題ありません。なお、食事は消化の良いお粥やうどんなどの炭水化物を与えましょう。みそ汁やスープ類もおすすです。

③熱を下げる工夫をしてみましょう。氷枕やアイスノンなどをタオルでくるんで首の周りやわ

や布団などをかけて温かくしてあげましょう。熱が高くなりほてってきて体や手足が熱くなれば薄着にして、毛布や布団の厚さを調節しましょう。なお、「温めて汗をかかせれば熱が下がる」というのは間違いで、温め過ぎると熱がこもってしまい逆効果になります。

④室温は冬で22度前後、夏は25〜28度、湿度は50%が目安ですが、大人が心地よい室内環境でよいです。

⑤入浴は元気ならさっと汗を洗い流す程度で行っても構いません。また、温めたタオルで拭いてあげてもよいでしょう。



⑥解熱剤は本人が元気にしていても食欲もある程度あり、眠れるようなら使う必要はありません。38.5度以上でつらそうにして

いる、水分も取らず食欲もない、眠れない、寝てもすぐに起きてしまうなどのときには使ってもよいでしょう。また、解熱剤を使っても熱が下がらないときがあります。多くの場合は熱は2〜3日は続くもので、解熱剤

⑦解熱剤の効果は30分から1時間程度で認められ、効果のピークは3〜4時間、効果持続時間は4〜6時間です。座薬と内服では効果の差はないと考えてよいです。なお、挿肛後15分以内に便と一緒に出てきた場合、再度挿肛してください。

⑧熱の日内変動としては、朝に低下した体温は午後から夕方にかけて0.5〜1度程度上昇します。また、乳児では泣いたときや哺乳時にも上昇し、衣類の影響などで37度後半まで熱が上昇することもよくあるため、軽装にして再測定をしましょう。

## 退職医師 からの メッセージ

令和4年3月末 退職者掲載



いけだ たつのぶ  
整形外科 医師 池田 達宣



1年間という短い時間でしたが大変充実したものとなりました。職員や地域住民の方々は皆穏やかで優しく、当初不安であった慣れない土地での勤務もすぐに馴染むことができました。また、茅野市、さらに諏訪圏域の新鮮でみずみずしい野菜、おいしい空気や水、綺麗な山々や星など日常生活を送る上でも大変魅力的な街で過ごせて良かったと感じております。今後も地域の方々が健やかであり続けるように願っております。

かじわら けんじ  
整形外科 医師 梶原 健嗣



いつも大変お世話になりました。私にとっては諏訪は初めての土地で働くことに不安もありましたが、多くの方に優しく支えていただき大変有意義な研修生活であったと思います。患者さんも皆優しく気配りのある方ばかりでした。来年度転勤となることをお伝えすると、多くの患者さんが別れを惜しんでくださるのがとても印象的でした。来年度は埼玉県 の病院へ配属となりました。距離は遠く離れてしまいましたが、諏訪中央病院で教えていただいたことを忘れずに新天地でも精進して参ります。

むらた つねあり  
麻酔科 医師 村田 恒有



『行雲流水、東の間の14年』

麻酔科に所属。仲間に恵まれ心地よい時空間であった。奇跡の医師免許の回復、赴任時既に高齢、久々の臨床現場への復帰、得体の知れぬ医師を受け容れてくれた病院にただただ感謝あるのみ。地域、患者さんを思う職員の姿勢に多大なエネルギーを感じた。「2010年かく迎えり」「わが心のアリスガーデン」を遺した。私は今、後期高齢者となり沖縄に住む。

仰ぎ見し 阿弥陀の嶺を まぶたに見 うちな一の地で ぬち守る今 (ぬち=命)

あさかわ ともひこ  
腎臓・糖尿病内科 医師 浅川 知彦



6年間大変お世話になりました。初期研修医の頃から育てていただいた地域の方々と諏訪中央病院には感謝しかありません。寒さの厳しい土地ではありましたが、非常に温かく見守っていただき日々やりがいを持って過ごすことができました。今後も腎臓内科医として精進していきたいと思ひます。本当にありがとうございました。

しおかわ つかさ  
整形外科 医師 塩川 司



1年間という短い時間ではございましたが大変お世話になりました。病院スタッフの方々や患者さんにお世話になりながらとても有意義な時間を過ごすことができました。長野県東信出身ですが、これまで茅野市にはほとんど来たことがありませんでした。しかしこの1年で茅野市、諏訪中央病院のことが大好きになりました。来年度はまた東信に戻りますが、この1年で学ばせていただいたことを生かしていきたいと思ひます。同じ長野県には勤務しておりますので今後もお世話になることもあるかと思ひますが、その際はまたよろしく願ひします。あらためて1年間ありがとうございました。



たじり ともや  
研修医 田尻 智哉

縁あり、この諏訪の地で医師としての一歩を踏み出ささせていただきました。医療に関する知識や技術だけでなく、豊かな自然、地域の歴史や文化についても触れ、学ばせていただきました。地域の方々、当院の職員の皆さまにも温かく受け入れていただき、感謝の念に堪えません。4月からは東京に戻り研鑽を続けます。ここで学んだことを葉籠中のもthingとして、医師として社会に還元できるように今後も努力して参ります。2年間ありがとうございました。



たきみや りゅういち  
研修医 瀧宮 龍一

新潟出身の私は海を見て育ちましたが、茅野に来て、暮れ際に稜線かすむ中、夕焼け小焼けが流れる、峰々がひととき美しいこの町をすぐに好きになりました。主治医として患者さんと「向き合う」ことを大切にしたい2年間、患者さんやご家族の皆さまとの出会いを通じ、医師としても一人の人間としても成長させていただいたように思います。医師としての最初の一歩をこの地で踏み出せたことは、この先私にとって大きな意味を持つと信じて止みません。全ての出会いに成長の種があると信じ新天地でも努力します。



まつもと なつみ  
専攻医 松本 夏実

医師としての最初の5年間で諏訪中央病院職員として勤務させていただきました。赴任当初は右も左も分からない状態からのスタートでしたが、病院スタッフや地域の皆さまに支えていただきながら多くの経験を積み、医師としての確かな基礎を培うことができました。「医療を通して地域の皆さまをより健康で幸せに」という夢を叶えるべく、4月からは原村診療所の職員として地域医療に従事する予定です。皆さまのお役に立てるよう、より一層努力を重ねて参ります。今後ともよろしくお願い申し上げます。



くぼ たけと  
総合診療科 (フェロー) 医師 久保 起人

諏訪中央病院に赴任して4年が経過しましたが、多くの患者さんやご家族からさまざまなことを教えていただき、医師人生においてかけがえのない経験をすることができました。今後は東京都の病院で感染症科の医師として研鑽を積む予定です。この地で学んだことを生かして、新天地でも頑張ります。4年間大変お世話になりました。本当にありがとうございました。



たけい りさ  
研修医 武井 理紗

1年間研修させていただき大変お世話になりました。八ヶ岳の四季折々の美しい風景に癒されながら駆け抜けてきた1年間でしたが、さまざまな先生・スタッフの方々と過ごしてきた日々がすべて大切な思い出であり、この病院での研修が終わってしまうことを名残惜しく思います。来年度からは信大病院の第二内科に入局し、消化器内科医になる予定ですが、この病院で学んだことを大切にこれからの医師としての人生を歩んでいきたいと思ひます。本当にありがとうございました。



やまだ りゅうのすけ  
研修医 山田 龍之介

2年間大変お世話になりました。全く分からないところからのスタートでしたが、四季折々でさまざまな八ヶ岳の表情を楽しみながら、地域の皆さまに支えられて研修を終えることができました。医師としての基礎、心構えを学ぶことができた貴重な2年間でした。ここでの経験を糧に今後も努力して参りたいと思ひます。ありがとうございました。



うえさこ はやた  
専攻医 上迫 隼太

1年間ありがとうございました。地域の皆さま・病院の方に支えられながら診療させていただきました。日々の診療で循環器の上級医のご指導や、生理検査の方々と毎週心エコーカンファを行ったり、諏訪郡医師会で講演した失神診療、コロナワクチンに関連した論文作成、松本協立病院での研修など、この1年間の経験は非常に有意義なものでした。振り返ってみると救えた患者さんもいれば、救えなかった患者さんもいます。後者の患者さんを一人でも少なくできるように諏訪での研修を生かして今後も診療していきます。



まるやま はじめ  
専攻医 丸山 創

3年間お世話になりました。地元での病院での研修はとても感慨深いものがありました。昔から知っている諏訪中央病院を職員として中から見ることができたのは自分にとって貴重な経験でした。病院職員、地域の皆さまにたくさん助けていただきました。4月以降は富士見高原病院でさらなる研鑽を積むこととなります。どうかかたちであれ、この地域での診療を継続していきますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。



うらた えり  
研修医 浦田 恵里

大阪から初めて移り住み、茅野に来て2年になりました。季節によって移り変わる雄大な八ヶ岳の景色に励まされながらやってきた研修医の2年間は、とても充実したものだったと思ひます。私が関わらせていただいた患者さんや地域の方々には、たくさん勉強させていただき本当に感謝しています。来年からは関西へ戻り、学生の頃からの目標である家庭医になるためにこれからも研鑽を続けていきます。ありがとうございました。



よこすか りょうすけ  
専攻医 横須賀 亮介

諏訪地域で半年間診療を担当させていただきました。東京とはまた違った患者背景、医療環境で慣れないところもありながら、さまざまな方に支えられ地域住民の方たちに対して自分が持てる限りの医療を提供できたのではないかとと思ひます。短い間ではありましたが、ここで経験したことを糧にしてまた医療に励んで参ります。

第29回

● ● ● 病院から地域へ ● ● ●

名誉院長 瀧口 實  
はまぐち みのる



前回は人口減少の弊害についてばかり書きましたが、私の学校時代を振り返ると良いことばかりではなかったことを思い出します。当時小中学校では田舎でしたが、机、イスが足りなく、いわゆる寿司詰め状態でした。狭い国土の日本では人口が多すぎ、人口密度がヨーロッパ以上に過密だと言われました。

でも大いに参考になる説だと思っています。日本の人口を見てみると人口減少社会となると思われます。しかし歴史の推移を見てみると、人口が明治になって異常に増えているのがわかります(グラフ)。そして、疫病、戦争、飢餓で2016年をピークにこの異常な増加状態が収束していくのではないかと考えられます。

世界的に人口が爆発的に増加しないのは、現在のコロナ感染を含めて疫病、戦争、飢餓の3つで人口の増加が抑えられてきたからでした。アメリカの進化生物学者ジャレド・ダイアモンドはその著書『銃・病原菌・鉄』で文明の推移について興味深い説を述べています。これからの飢餓問題、新たな感染死に対し

でも大きな問題で日本の将来がどのようになるのか若い人にはよく考えてもらわなければなりません。



https://www.dbic.jp/activities/2017/06/morita.htmlを参考に編集部作成

第17回

● ● ● 薬のはなし ● ● ●

薬剤師 関口 展貴  
せきぐち ひろたか



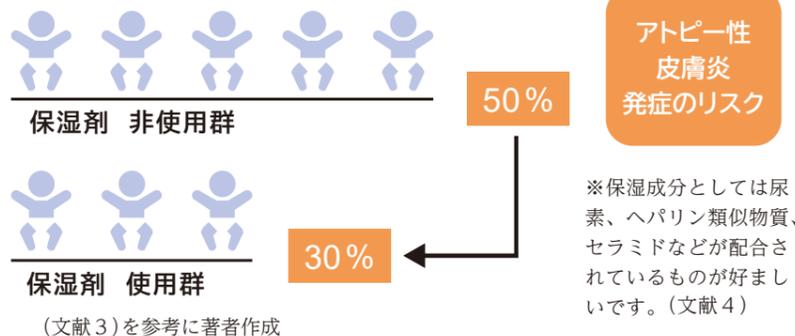
● ● ● 新生児期における保湿の重要性 ● ● ●

アトピー性皮膚炎は小児期の皮膚疾患の中で最も多いと言われています。(文献1)

また、アトピー性皮膚炎が起点となり、食物アレルギー・気管支喘息アレルギー性鼻炎が連鎖する「アレルギー(アトピー)・マーチ」の原因ではないかと考えられています。(文献2)

そこで早期介入によりアトピー性皮膚炎のリスクを軽減できた報告(文献3)をご紹介します。

この試験で使われたものは「保湿剤だけ」で、生後8ヶ月間、毎日保湿成分の入ったもので保湿を行った場合、そうで無い場合よりもアトピー性皮膚炎発症が抑えられました(図)。さらにアレルギーマーチも抑制される可能性があり、長期的な利益についても検討されています。



参考文献:(文献1)PMCID: PMC4397968 (文献2)日本小児アレルギー学会誌 33(3):316-325, 2019 (文献3)PMID: 25282564. (文献4)with NEO 33(6): 840-847, 2020.

※「薬のはなし」は今回で最終回になります。

第7回

医療現場の束の間のひととき  
★ ちびやちび ★

託児室めだか  
保育士 登内 美雪さんの回  
とのうち みゆき

当院では育児中の職員が安心して働けるように託児室を設けています。そこで30年以上に渡って保育士を勤めている登内さん。お弁当は手作りでお肉と野菜のバランスを考えて作っているそうです。お昼でも子どもを見ながらのため気が抜けませんが、子どもたちと接したり他の保育士と他愛のない話をするのが毎日の楽しみです。

日々、0歳児、2歳の子どもたちが、寂しい思いをしないよう催しを企画したりと楽しい時間を過ごせるようにしています。そんな子どもたちと過ごす中で、子どもたちの成長(初めての一步、初めての一言など)をお母さん方と共有し、一緒に喜べることにやりがいを感じているそうです。登内さんの座右の銘は「笑う門には福来る」。いつでも笑顔を絶やさず取り組んでいます。インタビューをしたときの印象も明るく、パワフルな肝っ玉母さんという感じでした!

休日は、手芸にハマっていて刺繍や袋(写真)などをお孫さんのために作ったり、一緒に制作して楽しんでるそうです!

新型コロナウイルスの影響でストレスがたまるとはありますが、そんな時だからこそ登内さんのように笑顔を絶やさず、楽しいひとときを過ごしていきたいですね。



第8回

● ● ● 365歩の日々 ● ● ●

介護老人保健施設 特別養護老人ホーム  
「やすらぎの丘・ふれあいの里」 日常と作品



まだまだ寒い日が続きますが、少しずつ春らしい作品も増えてきています。皆さまも奮のようにエネルギーを蓄えて、春には元気にエネルギーを爆発させましょう!



「やすらぎの丘の発展を祈願して~山の神様お願いだ~♪」今年も御柱年ということで、新年会で木遣りをうたっています!



例年同様に「寿司の日」も行いました。今年はサーモンが大人気でした!



医療の現場は日々忙しいイメージ。そんな中でお昼ごはんのひとときにお邪魔し、色々な角度から人物像を探るコーナー。

